

特217

874

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

仰信の講立佛門本

徹清達伊



院書方東



始



特 217
874

本門佛立講の信仰

伊達清徹

目次

第一序 説……………一

第二 信仰の對象……………九

第三 修 行……………二三

第四 信仰の目的……………三三

第五 結 勸……………四五

本門佛立講の信仰

伊 達 清 徹

第一序 説

一、名稱 佛立講と稱する根據は、宗祖日蓮聖人の御書中に屢用ひられた『佛立宗』の語に基いたものである。一例を挙げれば、

問テ云ク八宗九宗十宗ノ中ニ何レカ釋迦佛ノ立テ給ヘル宗ナル哉。予答ヲ云ク、法華經ハ釋迦所立ノ宗也。其故ハ已説、今説、當説ノ中ニ法華經第一ト説給フ。是レ釋迦佛立テ給フ處ノ御語ナリ。此故ニ法華ヲ佛立宗ト云ヒ、又法華宗トモ名ク。(日蓮聖人御遺文一六七頁——以下頁數ノミヲ出ス)

已ニ説クとは法華已前の經を指し、今説クとは法華同時の經を指し、當ニ説クとは法華以後の經を指す。この三説に超越して法華經は最第一なりと法華經第四卷 法師品に説かれてある。されば法華

二
經は諸經中の王である。從て釋尊の大悟の奥旨此外に無い。宗とは主ナリ、尊ナリと訓じ、最尊最上の義を意味する文字であるから、法華經を佛の立てさせ給ふ宗と稱するのである。猶ほ所屬本門法華宗開祖の日隆聖人が日蓮諸宗の墮落を責めて別に一宗を弘通せん爲め、京都に本能寺を建立する直前に、諸本山に主義信條を宣布した法華天台兩宗勝劣抄の中にも、屢佛立宗の文字が用ひられてある。蓋し諸宗は『人立宗』である。佛の御定めのまゝに弘めないで、勝手に自義を挿入して建立する宗である。我が今弘めんとするものは佛の御意に隨從し、一分の自説を加へない正直銘の佛教であるといふ事を表榜するものと推せらるゝのである。佛立講開發教導の師、日扇上人は宗祖の御意に依り次の如く述べられてある。

本門法華日蓮宗ハ久遠實成ノ佛ノ立テサセ給ヒシ宗旨ナル故ニ佛立宗ト云フ。經ニ云フ諸經ノ中ノ王ナリ、最モ第一ト爲ス。カクノ如ク立テサセ給ヒシ故ニ、其趣ヲ解説教導スル故ニ佛立講ト云フ。(本門佛立講旨)

本門佛立講ト申スハ、宗祖出世ノ御本懷、上行所傳ノ御題目ヲ廣宣流布セシメンガ爲ノ故ニ、トリ結ビタル講ナリ。法華宗ノミハ佛ノ立テサセ給ヒシ宗旨ナル故ニ佛立講ト申ス。天台宗ニ紛レヌヤウニ本門ト申ス也。講トハ御法義ヲ講説スルナリ。(萬年永續繁昌記)

二、開講 安政四年正月十二日、京都新町蛸薬師、谷川淺七(八品堂ト號ス)方にて開講。清風

自畫傳に云く。ハジメノ御講聽衆四人ナリ。後此講萬人ヲ以テ數ンズト思ヒオキテタリ。と當家主人文谷川淺七、妻シマ女、手代宗助、竹屋町三長の母ヒサ女以上四人で第一聲が發せられたのである。

三、開導上人傳 姓を大路といひ後、長松と改む、名は清風又は無貪と號し、日扇と稱せられた。幼名は仙次郎、長じて仙右衛門と改稱、父は延貞、母は國女、代々京都蛸薬師、室町西、姥柳町に住す。文化十四年四月一日同地に生まる。七歳の時甫めて書を青蓮院ノ宮御内入、圓山存古齋に就き、後同御内入、勝見主計に學び、更に栗田山田兵庫の門に入つた。晝は九歳の時、岸駒の高弟白井華陽に學ぶ。十歳にして晝畫に堪能なる故を以て平安人物誌に其名を留む。十七歳本居宣長の高弟、城戸千楯に就て國學歌道を修められた。廿五歳同門四百餘人中より選ばれて千種有功卿の御殿に源氏物語を講ず。前席には小泉將曹が古事記、長澤ともをが枕草紙を講じたさうである。家の宗旨は淨土宗であるが禪宗をも修め、又日蓮宗を行じ能勢の妙見の瀧へ一七日かゝつて祈つたことがある。廿六歳母を亡うて無常を感じ出家の志が發つた。

四十九日の墓參の歸るさ櫻の散るを見て、ちるまでも見てだに花にあかざるを、あな心なの夜の嵐や(歌)、又病中母の身にまとはれし衣服をほしたるを見て、おもかげのおしはかられて悲しきは母の朝よひ身になれしきぬ(歌)、又祖母貞薰尼が寺詣からかへられた時、わが母はいまかへるらし板橋のいたの上つく杖の音する(歌)などがある。如何に母を慕はれたかを推する事が出来る。これは父に早

く別れ母の手一つで育てられた爲であらう。其後江戸に遊學し重病にかゝり死生の巷をさまよはれた事がある。玉の緒を此世かの世によりかけて一筋ならぬおのが身をぞ今(歌) 病癒えて後、死ぬるとも生くともよしと思ふ身にまだあづかれる夢やあるらん(歌) など其時の述懐である。此事があつていよいよ出家遁世の志がつのつたのである。然し浄土や禪宗では満足出来ぬので、天台や眞言も學んだのであるが、二十九歳の時、京都本能寺で多くの門人を集めて席上揮毫を催した縁で、貫首日隆上人に謁し本門法華宗義を受けた。然るに宿縁深厚の爲めか遂に此の宗で出家の素懐をとげた。即ち慶應元年四月二十八日、三十二歳の時、最初に信仰の導きをしてくれた本能寺塔中、長遠院日雄師の傳書を受けて、當時學匠として宗内に聞えた、淡路津井の隆泉寺、心光院無著日耀上人(後に大本山妙蓮寺貫首)に從て薙髮染衣せられたのである。其後師の膝下で修學し、或は京阪へも往復されたが村上勘兵衛、村田麥浪など同信のすゝめにより、荒廢甚しき東山の西行庵に住み、讀誦唱題、或は寫經など怠らず修行された。其頃の歌に、讀誦と題して、あはれ冥加あらせ給へとよむ經を、いくらの諸天きゝいますらん(歌) 母菩提の爲に法華經を書寫し始むとて、うけがたき人の身だにもうれしきに今日くみ初むる法の水莖(歌) 滿願の日、かきをへし心のうちの涼しさは佛の外にしる人もなし(歌) 恰度其頃、讃岐高松の松平左近公が、三途不成佛といふ論を立てられた。此左近公といふは高松城主の舍弟であるが世塵を避けて法華宗の信仰に安住されて居つた方で、或日法席で、某僧侶が尋ねら

れるには、法華違背のものは墮地獄勿論であるが、其子孫が至心に追善回向されたら直に成佛致すべきや否や。然るに公は貴僧はどう思ふと反問された處、即身成佛何の疑かあらんと答へた。左近公は回向で天上人間に轉生する事は出来るが、直に成佛は出来得ないものである。そんな事で成佛が出来れば暇をつぶし骨を折つて信心する事も無いといふ意味を以て辯駁された。その爲に宗内は敵味方に別れ頗る騒がしい折柄、同公の招聘により渡海して此の問題に就て指導された。其後間もなくわが佛立講を開かれたのである。これは宗内の様子を見るにつけ聞くにつけ僧侶の墮落甚しく、從て宗風日々に衰へるのを歎かれて遂に身を挺して宗内改革の爲に立つ決心をされたのである。而して宗内改革というて議論をして歩くといふのでは無い。大に布教して熱心なる信徒を育成するのである。從て僧侶攻撃も随分せられた様である。

かたちこそ人を助くる姿なれ諸宗の坊主、土の人形

おほかたの世捨人には心せよ衣をきても狐なりけり

大講義大教正の名をつけて法をうれども買ふ人はなし

これが爲他宗他派の讒訴にあひ、明治元年第一回の法難、六角の大宮の本牢、切支丹ノ間に入れられ、又同五年第二回の値難等があつた。牢に三度入られ八度處をば追ひ出されつゝ立てし此の講(歌)の感詠がある。明治二十三年七月十七日早朝弟子二人と俱に多數信徒の見送を受けて京都を出發し、淀川

を船で下る途中、暑氣に堪へ難いので、大阪府下守口で上陸し休憩中遷化せられた。年七十四。これより先、五月上旬頃より老衰の爲め法席を休まるゝ事が屢であつた。而し少康を得れば又出講するといふ有様、高弟達は暗い心で師の姿を見守つてゐたのである。五月中旬に神戸の佛立寺開堂の式を営む筈であつたが發病の爲めに延期し漸く六月三日執行された。七日に歸京して二十日間も静養又七月一日から出講したが三日には氣色が頗る悪い。そんな状態が日々續く。十五日神戸の信徒淺田米吉への手紙の末に、思ひ見れば年は七十路あまり四つ、御用濟にて歸るのである(歌)の一首が添へられてあつた。十七日も大阪の信徒の懇請もだし難く下向されたのであつた。而も其途中で遷化されるといふのは、所謂倒れて後止むの言葉を文字通り實行されたのであると思ふ。大ていの人ならばかく老衰して居るのであるから出講は謝絶するのが當前である。然るに身體の續く限り布教に東奔西走された。これは日蓮聖人が、命ノ通ハンキハハ南無妙法蓮華經ト唱へテ唱へ死セヨ(九七二頁)とあるを身讀されたのであると信ずる。日頃弟子信徒へ、能役者は舞臺で死ぬを本望とする。其如く信者は御法の爲めに死ぬることを喜ばねばならぬと教訓されて居つた。教歌に

死ぬること案じてゐるも無益なりいけ／＼ばかり唱へ死せん
死ぬること御題目にて御安心、今がままで唱へ弘めよ

日頃教へて置いた通り實踐躬行されたのは實に尊い努力である。生涯墨染の一沙彌であつたが、遷化

後、其布教の功大なるを以て一躍、權大僧正を追諡せられ更に大僧正を加へられた。實に異數といはねばならぬ。遺詠數千首、遺書數百卷。

開導上人一代の布教の方法は、書や歌を縁として發信入講したのもも随分あつたが、大體は先づ病氣で困つて居る人を勸めて妙法を持たしめ、本人に妙名口唱の行を積ましめて治癒得益せしめ、徐々に教導して佛立主義に徹底せしめられたのである。信徒の信心前を初心、中心、後心の三つに大別された。初心といふのは自分の事の方に精進する分際で、佛祖の教訓に違背せぬやう朝夕の御本尊への奉仕、勤行をはげみ、講席や寺へ參詣し法話を聽聞する。中心といふは他を勸めて信心を持たしめる。これを教化又は御弘通の御奉公といふ。勿論自身は初心の根本になるやう勤行、參詣は勤めるのである。後心は、必しも學問とか財産とかは問題でない。不惜身命の決心ある者でなければならぬ。然しこれは表面上はつきり顯れて居ないのであるから、指導者の心中に認識して初心より中心へ、中心より後心へと導くのである。信徒を育成するに二つの方法がある。一は御講、信徒各自の宅で法席を営ませ法話をする。又、寺では月に數回參詣日を定めて參詣聽法せしむる。其時は開導上人は經文祖書等を講じ、一首の教歌に結んで領納せしめる。

書と歌はわが佛道の榮なれ、かきわくるにも思ひやるにも
歌にして教へて置けばいつまでも御法門をば忘れざりけり

歌よみにきかす歌ではこと狭し阿呆の耳にも入りやすくよめ

等、凡百の事を歌にして指南された。此の稿に於ても開導師の説を立證する場合には多くは教歌を出す考である。それは直接開導師の説に觸れた方が正確であると思ふからである。先年大本教の教義の講演を聞いた事があつたが、講師の意見のみ聞かされて少しも教祖の言葉所謂お筆先を出さなかつた。その時に思つた。これでは講師の考であるか教祖の考であるかわからぬと。加之今日では佛立講の教へが擴がつた爲めに、やゝもすれば末から末へと誤傳されて根本の本義を失うて居るのが随分あらうと思ふ。それで或は此の稿を見てあれは筆者の私見であるといふ風にゆがんで見られるかもしれない。それ故にどの程引證するのである。述者の意のある所を酌んで頂きたい。

第二の指導方法は信徒同志が相觸れ合つて行くやり方である。これは病人の出來た時に助行といふのをする。助行といふのは平癒を祈る本人が正行で、援助するのを助行といふ。組合の人々は入り變り立ちかはりして助行する。これが一週間なり二週間なり、或は一月二月等と續く。これで信者同志の異體同心は知らず識らずの間に堅く結成されるのである。事實下手な親戚より何程親しいか、又どの位頼りになるかそれは想像以上である。

四、嗣法 開導師は始め、花洛本門佛立講開發教導師と稱せられ後、略して單に佛立開導というて居られた。又講有とも稱せられてゐた。講の所有者といふ意味である。前者は信心上、後者は組織上

の役名のやうなものである。後継者は御遺言狀に依り高弟日聞上人(姓は御牧、名は現喜、後大僧正に進む)二世を嗣ぎ、在職二十餘年、明治四十四年八月二十五日遷化。三世には又、日聞上人の御遺言狀に基き日隨上人(姓は野原名は辨了、後大僧正に進む)就職十箇年在任。大正九年十二月十二日化。以來四世日教上人(姓は御牧名は現隨、權大僧正、東都佛立講初祖)を経て、第七世日淳上人(姓は西村名は現良、僧正)在職中である。

五、組織 本門法華宗に屬す。京都北野宥清寺を根本道場と爲し、全國各地及び朝鮮、滿洲等に布教所(親會場と稱す)散在す。統一機關は法燈相續者「講有」を戴き行政部として總務局に總理以下僧俗役員を有す。地方は支部と稱し、支部擔任なる僧侶の下に支部長以下役員あり。而して支部は組を以て組織し、些くとも百戸以上の信徒が無ければならぬ。組には組長等の役員がある。立法機關は地方支部より講政代議員を選出し講政會議を毎年春四月開會する。

第二 信仰の對象

六、本尊 日蓮聖人の顯はされた南無妙法蓮花經の本尊と生きて御座します御佛なりと信するが佛立講の根本信である。日扇上人云く、法華經ノ行者ノ御本尊ハ南無妙法蓮花經、南無妙法蓮花經ハ生身ノ佛ナリ。又日蓮大士ノ御タマシヒ也、故ニ文字即佛ナリ。二テク別ナントハ是也。經ニ云ク、

此中已有如來全身文、四五抄ニ云ク、文ニ非ズ義ニ非ズ一部ノ意ナリト。歌に、

妙法の生きていませる御佛を、たゞ文字なりと思ひけるかな
法花經の文字はもとより如來なりしか思へとはいふにあらじを

此中已有如來全身の文は法華經第四の卷。法師品の經卷所住ノ處ニハ皆應ニ七寶ノ塔ヲ起テ極
メテ高廣嚴飾ナラシムベシ。復タ舍利ヲモ安ズルコトヲ須ヒジ。所以ハ何ン此ノ中ニ已ニ如來ノ全
身有ス。の中の一句である。佛舍利をも安置しなくてもよろしい。何せなれば此の妙法蓮華經の中に
如來の全身がこもられてある。されば此の妙法五字を立派な殿堂を造立して奉仕し供養せよとの御意
である。又非文非義の文は、日蓮聖人の御指南に、妙法蓮華經ノ五字ハ經ノ文ニアラズ、其義ニアラ
ズ。唯一部ノ意ノミ(一五四二頁)この文と同じ意の御指南に、所詮、妙法蓮華經ノ五字ヲ當時ノ
人ハ名ト計リ思ヘリ。サニテハ候ハズ、體ナリ。體トハ心ニテ候乃至妙法蓮華經ト申スハ文ニ非ズ
義ニ非ズ一經ノ心ナリ(一六五六頁)ともある。日蓮聖人當時の天台宗等の學者どもは、妙法蓮華經
をたゞ御經の題目(名)に過ぎないとか、或は一句一偈(文)であるとか申して居つたのであるが、
そんな部分的なものでなく全體である。生命其物だとの意である。日蓮聖人はもつと具體的に述べら
れた文がある。無作三身ノ寶號ヲ南無妙法蓮華經ト申ス(御義口傳)又は釋迦多寶ノ二佛トイフモ用
ノ佛ナリ。妙法蓮華經コソ本佛ニテ御座シ候へ(九五九)ともいはれてある。尤も佛名として經文に

顯れて居るのではないが、前の法師品の御文を拜してもわかる様に、此の五字には如來の全身がまし
ますのであるから、御佛として御仕へするのである。それでこれを法面人裏の本尊と稱するのである。
元來佛と申すは、人間と妙法とが一體になつたお方であるから、妙法を表とすれば人間は裏となり
若し人である佛を表とするときは妙法は内面にかくるゝわけである。故に妙法蓮華經は法面人裏の本
尊、佛は人面法裏の本尊、畢竟二者一體である。これを人法一箇とも、人法一體とも申すのである。
然らばなせ人面法裏の佛を本尊とせず、法面人裏の妙法を本尊とするかといふに、これにはいろ／＼
の義がある。第一釋尊出現時代は所謂人面法裏であるが、入滅後は其遺教が主となるのであるか
ら、法面人裏となるのである。第二は附屬の法に約する。法華經には本化上行菩薩を召出して我滅
度の後、此の五字を以て一切衆生を助けよと附屬せられた。而も此の時の御言葉には、此の五字には
如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、
皆此の中に宣示顯説す(七ノ卷如來神力品)と御説き遊ばされてある。佛名よりも佛像よりも遙に勝
れてましますのである。佛名や佛像では全きを得られぬが、此の五字ならば如來の有する一切の法も
神力も、何もかも悉く具有、顯現して居るのである。第三に下種の義に約する。下種とは一切衆生
の已心に備つてある佛性を開顯することである。而して其佛性を妙法蓮華經と名付くる。一切衆生よ
汝の心の名は妙法蓮華經であるぞ、釋尊の大悟の玄底なる此の妙法こそ汝等の佛性の名であるぞと教

示するが日蓮聖人の出現の使命である。されば此の五字を日蓮黨の旗印とするのが即ち本尊となり、

宣傳の標語とする所に題目口唱行が生ずる。日蓮聖人云く、法華弘通ノ旗印トシテ顯ハシ奉ルナリ。是レ全ク日蓮ガ自作ニアラズ、多寶塔中ノ大牟尼世尊、分身ノ諸佛、スリカタギタル本尊ナリ(一六

二五頁)或は、日本乃至漢土月氏一閻浮提ニ人毎ニ有智無智ヲキラハズ、一同ニ他事ヲステ、南無妙法蓮華經ト唱フベシ。此事未ダ弘マラズ。日蓮一人、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經ト聲ヲ惜マズ

唱フルナリ。(一五〇頁)など示されてある。以上の次第で妙法は法の姿を以て顯はされて居るけれども、其實體は生身の如來である、と信するが佛立講の教へである。開導の教歌には、

七、日蓮大士

妙法の本尊の御前に日蓮聖人の木像を安置して生きて御座す祖師と御仕へする。妙法五字の本尊を生身の如來として仕へると同様である。されば祖像の御前にて其の遺書たる如説修行抄を拜讀する音聲を聞く時は生身の祖師の御聲を聞くと思へと指南されてある。佛立開導の教歌に

生きています祖師の教をうけながら、こは御書なりと思ひけるかな
此の木像を生身に拜み奉ることは宗祖日蓮聖人の觀心本尊抄に、木畫ノ二像ニ於テハ外典内典共ニ之ヲ許シテ本尊トナス乃至草木ノ上ニ色心ノ因果ヲ置ズバ木畫ノ二像ヲ本尊トタノミ奉ルモ無益ナリ(九二九頁)と示されたものに依るのである。

本尊と祖像との關係は、祖師日蓮聖人は本尊を顯し弘め給うた能顯能弘の導師、本尊は所顯所弘の法である。然し、日蓮がタマシヒヲ墨ニソメ流シテカキテ候ゾ。日蓮ガタマシヒハ南無妙法蓮華經ニスギタルハナシ(九八六頁)と示されてあるから、此の二者は一體不二、不二にして而かも二なるものである。併し乍ら、本尊は必ず無ければならぬものであるが、祖像は必ずしも安置しなくてもよろしい。祖師は本尊の中にましますが故である。たゞ末法の大導師として、日蓮は日本國ノ諸人ニ親シキ父母(八二三頁)であるから、恰度父母の位牌の前に寫眞を置くといふ親子の情に似たる心地より、特に造立し奉るものである。

第三修 行

八、自行の三業 信心修行は自行、化他行の二つを備へなければならぬ。先づ自行の三業とは身と口と意で信心修行するのである。意に本尊は生身の如來にましますと信じ、身に尊敬の奉仕を懈らす口に南無妙法蓮華經と唱へ奉るのである。就中、口業の唱題を以て修行の正位とするのである。なせかといふに、意は大切には相違ないが我等の心位當てにならぬものはない。今火のもえ立つ様な信

心前ココロと思おもうてゐると、もうさめて忘れた様ようになつてゐる。心ココロが本位ほんゐとなると信心しんじんに時々ときとき斷滅だんめつがある、それに老幼らうじゆう、男女なんにょ、賢愚けんぐによりて大變たいへんな相違さうゐが生ずる。それで心ココロを本位ほんゐとせず口業クツゴフを本位ほんゐとする。口くちで妙法めうほふ五字ごじを唱となふるが成佛ぶつじやうの主因しゆゐんとなれば老幼らうじゆう男女なんにょ賢愚けんぐの差別さべつはない。皆平等みなびやうどうに修行しゆぎやうすることが出来る。非常ひじやうに喜んで居る時も、關心くわんしんを持ってなくなつた時でも口くちに任せて唱となふる事には格段かくだんの差さは生しやうじない。一例いちれいを擧あげて見ると日蓮にちれん聖人しやうじんの信念しんねんと今日の末弟まつていや信徒しんねんの信念しんねんとは天地てんちの相違さうゐがあるが、口くちで唱となふる段だんになれば日蓮にちれん聖人しやうじんの唱となふる妙法めうほふ五字ごじも、愚おろかなな今日の信徒しんねんの唱となふる題目だいめくも同一どういといはねばならぬ。これは聖人しやうじん在世しやうじんの時に既に或る信者しんじやが聖人しやうじんノ唱となへサセ給たまフ題目だいめくノ功德くつとくト、我等われらガ唱となへ申まをス題目だいめくノ功德くつとくト何程なにほどノ多少せうせう候まをベキヤ(一五二三頁)と質問しつもんされたに對し、更さらニ勝劣しやうりやくアルベカラズ候まを其故そのゆゑハ愚者ぐしやノ持もチタル金かねモ智者ちしやノ持もチタル金かねモ、愚者ぐしやノ燃もセル火ひモ智者ちしやノトモセル火ひモ其差別そのさべつナキ也(一五二三頁)と答こたへられてゐるを見て知られるであらう。佛立開導師ぶつりふかいだうしは殊ことに此この口唱くちやう正位しやうゐを強調きやうじやうされた方かたである。

法のりの水みづ結むすぶ心こころは濁にごるとも、口くちに唱となふる聲こゑしすめらば

唱となふるが信心しんじんなれば唱となへずに有難ありがたがるは信心しんじんでなし

口唱くちやう程ほど不思議ふしぎに妙たえな行ぎやうはなしその身みはまめに心こころかしこに

然しかし如何いかに口唱くちやう本位ほんゐとは申まをせどんな事ことをしてよいといふのではない。上うへに擧あげたる日蓮にちれん聖人しやうじんの聖

愚平等ぐびやうどうの御指南おんしなんの次下じかに、但たゞシ此經このきやうノ心こころニ背そむキテ唱となへバ其差別そのさべつ有あルベキナリ(一五二三頁)とて法華ほふ經きやう第二だいにの卷譬喻品まきひゆひんの十四じゆう謗法ぼうほふが述のべられてゐる。謗法ぼうほふトハ法ほふニ背そむクトイフ事ことナリ(四四九頁)と示しめされて、法華經ほふけきやうの心こころに背そむくことが謗法ぼうほふである。而しかも謗法罪ぼうほふざいの重おもいことは實じつに大なるものである。日蓮聖人にちれんしやうじん人は、謗法ぼうほふハ無量むりやうノ五逆ごぎやくニ過あギタリ(八六六頁)と斷だんせられてゐる。五逆罪ごぎやくざいといふは佛法世法ぶつほふせほふに互ある重罪ぢゆうざいである。それよりも無量無數むりやうむすう倍勝ばいせうれたる大罪だいざいである。されば、何いかニ法華經ほふけきやうヲ信しんジ給たまフトモ謗法ぼうほふアラバ必かならず地獄ぢごくニヲツベシ(一五一五頁)とも誡いめられてゐる。此この謗法ぼうほふに就つて佛立講ぶつりふかうは尤もつとも八箇間敷やつかまじ取扱とりあつかうてゐる。開導かいだうの歌うたに、

諸もろの重おもきむくひの其中そのなかに謗法罪ぼうほふざいにすぎたるはなし

大君おほきみの御國みくににすみて大君おほきみをそしる如ごときを謗法ぼうほふといふ

然しからば何なにが謗法ぼうほふかと申まをせば、當宗たうしゆう以外いげいの佛ほとけに信仰しんかうを致いたすことである。日蓮聖人にちれんしやうじん云いはく、

タトヘバ大塔だいたつヲクミ候まをニハ先まヅ材木ざいもくヨリ外ほかニ足代あししろト申まをシテ多クノ小木せうもくヲ集あつメ一丈二丈計いちぢゆうにぢゆうけいリユヒ上うへゲ候まを也。カクユヒ上うへゲテ材木ざいもくヲ以もつテ大塔だいたつヲ組くミ上うへゲ候まをツレバ、返かへテ足代あししろヲ切きリ捨すテ大塔だいたつハ候まをナリ。足代あししろト申まをスハ一切經いっけきやうナリ。大塔だいたつト申まをスハ法華經ほふけきやうナリ。佛ほとけ一切經いっけきやうヲ説と給たまヒシ事ことハ法華經ほふけきやうヲ説とセ給たまハン爲ためノ足代あししろナリ。正直捨方便しやうじきせんべんト申まをシテ法華經ほふけきやうヲ信しんズル人ひとハ阿彌陀經あみだきやう等らうノ阿彌陀佛あみだぶつ、大日經だいじきやう等らうノ眞言宗まんとんしゆう、阿含經あがんきやう等らうノ律宗りつしゆうノ二百五十戒等にひやくごじゆうけいヲ切きリステ抛なゲテ後のち、法華經ほふけきやうヲバ持もチ候まをナリ(一九九五頁)

從來信仰せし佛菩薩等の本尊守札を皆拂ひ清めることを謗法拂といふ。これが出来なければ佛立講の信者とはいへない。従て邪道に墮して居るものなるが故に現當二世の利益に預ることは出来ない。

御利益の隔てとなれる不思議さは他宗堂社の札守りすら謗法を拂はばな利生あらはれず雲が晴れば月も拜めず

謗法を拂ふ薬のよくきゝて重きやまひのなる妙法自家安置の佛壇が清められ妙法五字の本尊をおまつりしたらば次は當然從來の信仰行爲をも改むべきである。

法華經ヲ行ズル人ノ、一口ハ南無妙法蓮華經、一口ハ南無阿彌陀佛ナンド申スハ、飯ニ糞ヲ雜ヘ、沙石ヲ入レタルガ如シ。法華經ノ文ニ、但ダ大乘經典ヲ受持スルコトヲ樂フテ、乃至餘經ノ一偈ヲモ受ケザレ等ト説クハ是也。世間ノ學匠ハ法華經ニ餘行ヲ雜ヘテモ苦シカラズト思ヘリ。日蓮モサコソト思ヒ候ヘドモ、經文ハ爾ラズ。譬バ后ノ大王ノ種ヲ姪メルガ、又民トトツダバ王種ト民種ト雜リテ、天ノ加護ト氏神ノ守護トニ捨テラレ其國破ル、縁トナル。父二人出來レバ王ニモアラズ民ニモアラズ人非人ナリ。法華經ノ大事ト申スハ是也(一九三〇頁)

日蓮宗と名乗つてゐるものの中に、此の宗祖の禁を守つてゐるものが何人あるだらう。謗法拂が佛立講の特色の一と數へらるるのは寧ろなさない次第である。猶序乍ら述べて置くのは別社勸請謗法と

いふことで、これは世間に妙法本尊から離れて別社に種々の佛菩薩諸天を祭つてゐるのを散見するが、よし本尊中に日蓮聖人が書顯されてある佛名であつても謗法となるのである。末法今時に於ては南無妙法蓮華經のみが本尊で他の一切の佛菩薩等は妙法の體内にこもられてあらねばならぬ。隨て、妙法本尊中より離れて別に獨立して安置することを許さぬ。恰も妙法は一本の樹で、他は皆枝葉である。枝葉は樹の幹から發生して其生命を保つて居るのであるから、萬一これを樹の幹から切離すと同時に其枝葉の生命は失はれて仕舞ふやうなものである。

以上は謗法の大體の説明で、曩に擧げた十四謗法は其細別であるから茲には略することにす。猶佛立講だけで通用して居る言葉に、懈怠謗法、不養生謗法などがある。然しこれは實際上から生じた言葉で、教義上に取立てゝいふ程でないから、これ又略することにす。

九、妙講一座 本尊の御寶前に於ての修行方法は、開導日扇上人の制定された妙講一座による。妙講一座の内容は、一懺悔、二勸請、三回向、四隨喜、五發願の五種の文を唱へて、而して後南無妙法蓮華經を高聲に口唱するのである。第一に懺悔の文は、無始已來謗法罪障消滅、今身ヨリ佛身ニ至ル迄、持テ奉ル、本門ノ本尊、本門ノ戒壇、本門事行八品所顯、上行所傳、本因下種ノ南無妙法蓮華經、以上、過去無始久遠已來、妙法に背き來りし謗法罪を懺悔し、只今より成佛の大目的を達成するまで本門の本尊を信仰、本門の大戒を持ち本門の題目を口唱し奉ると誓願するのである。第二に

勸請、これは如來在世の諸尊、即ち本尊に顯現せる聖衆及び宗祖日蓮聖人已下嗣法列祖を勸請し其の威光倍增、法樂莊嚴を祈るのである。文章が長いから略する。第三回向、自身の今修行する所の功德を法界群靈の佛果菩提の爲めに回向し、又持經者の面々の信行不退、現未の二世大願成就、祈る處の病者の面々の當病平癒、扱は一天四海皆歸妙法等を祈請する。第四隨喜は此の稀有の妙法に値ひ奉りしを喜ぶ。法華經第六の卷、隨喜功德品に云く、若し人、法會ニ於テ、是ノ經典ヲ聞クコトヲ得テ乃至一偈ニ於テモ隨喜シテ他ノ爲ニ説ク云云。法を聽て隨喜するの文であるが、今は法に値遇したるを隨喜するのである。文は略す。第五は發願、願クハ生々世々、菩薩ノ道ヲ行ジ、無邊ノ衆生ヲ度シテ、永ク退轉ナカラシムコトヲオモフモノナリ。以上。發願は誓願を發すること、一般の祈願の願よりは非常に強い意味が籠つてゐる。誓といふものは恰も牛馬に對する御のやうなものであると譬へられてある。馬や牛は御するものが無かつたら、途草をくうてなかく目的地に達しない。それと同じで此の誓といふものが無いと兎角なまけ勝になりやすいものである。誓願に就て總願、別願の二種がある。阿彌陀如來の四十八願、藥師佛の十二願、釋迦佛の五百の大願などはそれ々の佛の特殊の誓願で、これを別願といふ。總願といふのは一切の菩薩に通ずる大願で四つある。一衆生無邊誓願度、二煩惱無數誓願斷、三法門無盡誓願知、四無上菩提誓願證。以上を四弘誓願といふ。處で、此の四つの中第六の願は最上の目的たる成佛そのものであるが、これに到達するには第一の願が極めて重要で

ある。日蓮聖人云く、菩薩ト申スハ必ず四弘誓願ヲオコス。第一衆生無邊誓願度ノ願成就セズバ、第四ノ無上菩提誓願證ノ願モ成就スベカラズ(一〇〇四頁)と。そこで佛立開導師は第一の願を前掲の如く一つ丈發さしめ、その一願に全力を注がしめんと教導せられたのである。他を差置くことを教歌に、

こんど目に娑婆に來たとき又申す、法門無盡誓願知

扱、以上の五種は即ち五種の懺悔である故に略して五悔ともいふ。なぜこれが懺悔となるかといふに、第一の懺悔はいふ迄もない。第二の勸請は佛菩薩の來臨影向を祈請するもので、佛よ來つて、我等を救護し給へと祈る。これは今迄、佛を嫌ひ寧ろ滅し去れというてゐた罪を懺悔するのである。第三回向、他を倒しても自利を計つてゐた罪を滅ぼさんが爲に自身の修行した功德を他に回施せんとする懺悔である。第四は隨喜、他人の善事を嫉みそねみ、果ては妨害をも加へてゐたのを懺悔する。第五發願、これは今迄の懈怠の罪を懺悔するのである。これ等の要文を言上した後に、本門八品所顯上行菩薩所傳の南無妙法蓮華經を口唱し續けるのである。口唱行を五悔の要文との關係は、口唱は正修の事觀で、五悔は助觀となるのである。口唱行を事觀といふのは先づ觀法に事と理との二つがあることを知らねばならぬ。天台宗の觀法は理觀で、身口意三業の中には意業に屬する。日蓮聖人は理を捨て、事相に就き口業正位を以て惡人指導の第一方法と立てられたのである。佛立導師の歌に

妙法を口にまかせて唱ふるを本門事行観心といふ

あなたふと妙と唱ふる聲の内に三千觀をなすになるとよ

正觀の口唱を薬とすれば助觀の五悔は解毒劑である。先づ過去の謗法罪障の毒を懺悔陳露して、而して後妙法の大良薬を服するのである。天台の六祖、妙樂大師は、古衣を浣ふに先づ灰汁を以てし後に清水を用ゆるが如しと説いて居る。これもよい譬喩である。猶ほ口唱の修行の中で宗祖日蓮大士の昔、如説修行抄を拜讀する。これは不離身抄ともいふ。此書御身ヲ離タズ常ニ御覽アルベク候と書添へられてあるに基くのである。信心増進、信行不退の爲に拜讀する。又法華經第七の卷如來神力品の上行附屬の一節を訓讀する。これは上行菩薩末法出現を讚歌する意と、此經受持のものは必ず成佛疑ひなしの金句を隨喜する意とが含まれてある。

此の神力品の一節を讀誦するに就て、或人が讀誦謗法とて經文讀誦を誹謗する佛立講が御經を讀むのは自家撞着だと非難された事があつた。佛立講は必しも經文讀誦を攻撃するものではない。現にかく少しでも讀經して居るのでもわかる。然るになせ讀誦謗法といふ言葉があるかといふに、開導師は讀誦に二通りある。一は讚歌讀誦、二は輕賤讀誦である。いふ迄もなく末法は下種の時である。從て下種の妙法五字口唱が正行である。讀誦は補助行である。然るに當今の日蓮諸宗を見るに、其正行の妙法口唱を初心の劣行かの如く取扱ひ、助行たる經文讀誦を後心の勝行と思はせ振りにや

つて居る。この正傍倒置は下種の大法たる妙法を輕賤するものなりと責めるが讀誦謗法の語である。妙法五字の弘通の爲にする讀誦ならば讚歌讀誦であるから誠に結構なんであると示されてある。次の教歌を以て其意のある所を推知せられたい。

お經よめ心得てよめ末法は、下種のみぎりと心得てよめ

題目でお布施がとれぬもの故に在家のしらぬ御經よむなり

題目は是好良藥、法華經はこの妙薬の機能がきなり

一〇、化他の三業

自行滿れば必ず化他ありといふのが一般であるが、佛立開導の教は左様ではない。自行を滿す爲めに化他行をするのである。これを化他即自行といふのである。即ち曩に四弘誓願の處で述べた如く、衆生無邊誓願度の願が成就せなければ無上菩提誓願證の目的が成就しないのであるから、自身が成佛する爲にはどうしても一切衆生を成佛の道に引き入れねばならぬのである。法界の一切衆生と申せば人類に限らず、禽獸蟲類の畜生道、餓鬼道、地獄道のもの迄含めていふのであるから誠に無邊の衆生である。從てこれを悉く教化するには一生や二生で出来るものでない。生々世々の大願である。開導の歌に、

助くべき衆生無邊の娑婆なれば、度願の菩薩來たりいんだり
折伏にくたびれたらば一やすみ、してまたすぐに娑婆に出でこん

死に變り生れ變りてこの娑婆に修行するこそ菩薩なりけれ
 扱て化他の三業とは如何。慈悲を懷くは意業である。折伏の聲を發つは口業である。弘通の爲めに
 東奔西走、而も憎まれ謗られ、或は打擲等を被むるは身業である。開導の歌に、
 折伏は慈悲より出づる教なり、我身の罪も遂にほろびん
 折伏は人を憎まず高ぶらず、あはれむ事ぞ祖師の御本意
 何の爲め憎まるゝをや喜ばん人を助けて慈悲のあまりに

娑婆にては我が成佛をさしおいて人を折伏するが肝腎
 信心といふは折伏、折伏をせねば御弟子といふいはれなし
 折伏のいくさの時は一人でも教化したるぞ手柄なりける

のりの爲め押入れらるゝ牢獄は死しての後の淨土なりけり
 着つゝわれ忍ぶ恨みを身に重ね、法の衣と思ふうれしさ
 憎まるゝ程に御法に仕へよと親の教へにかなふうれしさ
 初めは意業(慈悲) 次は口業(折伏) 三は身業(値難)の意味を顯す。かく慈悲の念を懷いて折伏

苦行を行すれば、それが我身の罪滅となり、手柄となり、淨土參拜となるのである。化他即自行であ
 る。翻つて曩に述べたる自行の三業は單なる自行とのみ見えたが、化他行を自行の一部と解する時
 は自行も亦單なる自行ではなくて、やがて又化他行となる事を知ることが出来る。即ち意に法を信じ
 口に妙名を唱へ身に恭敬禮拜することはそれが取も直さず他人の手本となるのである。他はこれを見
 聞して隨喜の心を起す。これは化他を意識してもせんでも其効果は必ず發生するものである。就中口
 唱の行は其の及ぶ範圍が非常に廣いので特に口唱即化他として稱揚されてある。

南無妙と唱ふる聲が世の人の耳に聞えて折伏となる
 世の人の耳に聞えて妙法を唱ふる聲を折伏といふ
 惜まるゝ心にかちて目に見えて供養參詣するが折伏

財を惜み勞を惜む欲心に打勝て、他を供養し或は參詣を勵むは罪滅の自行であるが、それが其儘化
 他の折伏行となる。かく自他が相即して遂に成佛の大目的が達成せられるのである。

一一、教化 化他行は文字の示す如く、他を教化して此の妙法五字を受持口唱せしむることであ
 る。然るに何故に妙法を受持せざるべからざるかの問に對して説明すべき語は、妙法蓮華經は汝自身
 の名であるからこれを受持せねばならぬと答ふべきである。日蓮聖人云く、
 夫レ無始ノ生死ヲ留メテ此度決定シテ無上菩提ヲ證セント思ハ、須ラク衆生本有ノ妙理ヲ觀ズベ

シ。衆生本有ノ妙理ト者、妙法蓮華經是レナリ。故ニ妙法蓮華經ト唱ヘ奉レバ衆生本有ノ妙理ヲ觀ズルニテアルナリ（一一七頁）

元來法華經は何の爲めに説かれたのかといふに、衆生本來として具有する佛知見を開發せしめんが爲めである。法華經第一の卷、方便品に云く、

諸佛世尊ハ唯一大事ノ因縁ヲ以テ世ニ出現シ給フ。舍利弗、云何ナルヲカ諸佛世尊ハ唯ダ一大事ノ因縁ヲ以テノ故ニ世ニ出現シ給フト名ル。諸佛世尊ハ衆生ヲシテ佛知見ヲ開カシメ清淨ナルコトヲ得セシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シ給フ。衆生ニ佛知見ヲ示サント欲スルガ故ニ——衆生ニ佛知見ヲ悟ラシメント欲スルガ故ニ——衆生ヲシテ佛知見ノ道ニ入ラシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シ給フ。云云。

これを開示悟入の四佛見といふ。大悟徹底の佛知見が衆生の己心に具有されて居るのを開示し、悟入させたい斗りに佛は世に出現したのであるとの御意である。此の佛の内容を第六の卷、如來壽量品に説き顯はされた。如來一代の説教、五千七千の經卷中、此の壽量品の如き佛の内容を説いた經は全く無いのである。五百塵點劫といふ久遠の昔、佛は凡夫として菩薩道を行じ、己心の佛知見を磨き上げられたのである。これを久遠の本佛といふ。此の本佛のお悟りを妙法蓮華經と名ける。今我等が奉仕する本尊こそ即ち本佛の妙法蓮華經でありますのである。本佛の全體は此の本尊に顯現して居

る。然るに日蓮聖人は何の爲めにかゝる本尊を開顯されたかといふに、一に我等の佛性の名なるを教へ、而して此の尊貴なる本佛の大慈悲の光りを被むらしめて我等に佛性を磨き上げさせんとすの御心からである。日蓮聖人云く、

深ク信心ヲ發シテ日夜朝暮ニ又懈ラズ磨クベシ。何様ニシテカ磨クベキ。只南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ルヲ是ヲミガクトハ云フナリ。抑モ妙トハ何ト云フ心ヅヤ。只我が一念ノ心不思議ナル處ヲ妙トハ云フナリ。不思議トハ心モ及バズ語モ及バズト云フ事ナリ。乃至此ノ妙ナル心ヲ以テ法トモ云フナリ。此法門ノ不思議ヲアラハスニ譬テ事法ニカタドリテ蓮華ト名ク。云云（一一九頁）

佛立開導の教歌に、
妙法はわが佛性の名なりしを、きかずは我といかで知らまし
人皆の心の名ぞと驚は、法、法華經とつぐるなるらん

あなたの佛性の名が妙法蓮華經である。といふことを教へるのが教化で、これを下種の妙行といひ日蓮聖人は下種の導師、妙法は下種の大法といはれるのである。

妙法は佛の種といふことを授けたきゆる憎まるゝなり
五字口唱、一部讀誦にすぐれたり知らずやこれは下種の大法

一二、現證利益 末法弘通の目的は上に述べた衆生己心本有の妙法を開示するにあるのであるが、

借て教化の實際となれば殆ど耳を傾ける者さへも無い。茲に於て各宗各派何れも布教法に苦心する譯である。日扇上人は末世の悪人には道理や經文を引いて説明しても到底問題にならぬ事を觀察し、現證利益を以て發信せしむるより外無きを悟られたのである。教歌に、

いか程に講釋すとも妙法の御利益見ねば信は起らず
目に見えた御利益なくば法華經を眞實經と誰かしらまし

現證利益は發信の門として多大の効價を有する。併し乍らこれは日扇上人の發明に基くものでは無い。宗祖大士が六百有餘年前はつきり示されたものである。

日蓮佛法ヲコ、ロミルニ道理ト證文トニハ過ギズ。又道理文證ヨリモ現證ニハスギズ(一一二五五頁)如何シテカ今度法華經ニ信ヲ取ルベキ。信ナクシテ此經ヲ行セシハ手ナクシテ實ノ山ニ入り足ナクシテ千里ノ道ヲ企ツルガ如シ。但シ近キ現證ヲ引テ遠キ信ヲ取ルベシ(一一五六頁)サレバ過去未來ヲ知ラザル凡夫ハ此經ハ信ジ難シ。又修行シテモ何ノ證カアルベキ。是ヲ以テ思フニ、現在ニ眼前ノ證據アラズル人此經ヲ説カン時ハ信ズル人モ有リヤセン(一一五七頁)元來現證といふ文字はいろ／＼の義に用ひられてゐるが、第一に、文證に對する現證で、佛法ト申スハ道理ナリ(一六三四頁)であるが、この道理を眞理なりと直に受納し得ざるものゝ爲に經文或は祖師先哲の文書を以て立證する。これを文證又は證文といふ。然るに此の文證も信じ切れない者の

爲には現實の證據を以て示すより外方法は無いのである。即ち修法によりて不思議の利益を示す時始めて發信するのである。佛法の本領は道理と經文であるが、而し布教の上から考へる時は道理文證より現證の方が効價は多いとの宗祖聖人の御指南である。日蓮聖人は道理一方で布教をされた様に思ふ人があるかも知れぬから今更に二三の祖書を引て見ることにする。

人界所具ノ佛界ハ水中ノ火、火中ノ水最モ信ジ難シ。然リト雖モ、龍火ハ水ヨリ出デ、龍水ハ火ヨリ生ズ。心得ラレザレドモ現證アラバ之ヲ用ユ乃至此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズベキナリ(九三三頁)御親父御祈禱ノ事承ハリ候。佛前ニテ祈念申スベク候。乃至肝要ハ此經ノ信心ヲ致シ給ヒ候ハバ現當ノ所願満足アルベク候(一一五六頁)

然レバ則チ罰ヲ以テ利生ヲ思フニ、法華經ニ過ギタル佛ニナル大道ハナカルベキナリ。現世ノ祈禱ハ兵衛ノ佐殿、法華經ヲ讀誦スル現證ナリ(一八〇七頁)

現證布教の根本は佛である。法華經第二の卷、譬喩品に三車と大白牛車との譬が説かれてある。それは何事も知らずに火宅の中に遊んで居る我子を助けようと父が一生懸命で呼び立てるが子供等は、何が火事だと一向聞き入れない、それで遂に一案を考へ出した。即ち牛車、鹿車、羊車の三車を貸して上げるから早く出て来いと叫んだ。すると何れも遊戯を止めて相争うて飛び出して来た。經の原文を引いて見よう。

汝ノ欲スル所ニ隨テ皆當ニ汝ニ與フベシト。爾時ニ諸子、父ノ説ク所ノ珍玩ノ物ヲ聞クニ、其願ニ適ヘルガ故ニ、心各勇銳、互ニ推排シ競フテ共ニ馳走シ、争ウテ火宅ヲ出ヅ。今迄顧みもしなかつたものも自身の利益といふことになれば、他を推排し、争うてやつて來るといふ所は、正に末法今日の機情にソツクリといはねばならぬ。俗飛び出して來た子供達に對しては三車でない一大白牛車を與へた。理屈から云へば、こりや約束が違ふ。おれは羊の車だ、イヤ僕は鹿の車だといふのであるが、そんな理屈もいはず大に喜んだ。

各々大車ヲ得テ未曾有ナルコトヲ得タルハ、本ノ所望ニ非ザル如シ（譬喩品）と。望外の賜物に喜んだのである。所で子供はそれでよいとして、釋迦佛は、サテ舍利弗よ、お前は どう思ふ、三車をやるというて大白牛車をやつた父は嘘付といふ批難を受けるのが當然と思ふか、どうじや。舍利弗尊者は假令ひ一物を與へずとも火難を免れ一命を全うすることが出來た丈でも充分である。況や望外の大車を賜ふをやと答へられた。願ふ所のものを與へるといふのは現證利益である。望外の賜物といふは成佛の一大事である。現證利益によりて發信した爲め入講の際豫期せざりし成佛てふ大利益を頂戴することが出來る身の上となつた。これ入講者には本の所望では無かつたのであるが、教化するもの、方では當然の豫定行動であつたのである。或は思ふ人があるかもしれぬ。現證は方便で成佛が眞實目的とすれば、現證は所謂の嘘も方便といふ程度のものかと。否、否、決してそんな

な輕薄なるものではない。宗祖聖人は現證の有無によつて成佛の成非を決すると述べられてある。それは文永八年二月末より晴天のみ續て一滴の雨もない。三月、四月、五月、六月と徒らに過ぎ庶民大に苦しんだ。執權時宗大に憂ひ、日頃歸依厚き極樂寺の良觀上人へ祈雨の依頼をされた。早速御受けして六月十八日より祈りにかゝることになりました。その事を宗祖聖人が聞き及ばれて、時こそ來れり。現證を以て彼を屈伏せしめんと直に使を遣はされた。

余案ジテ云ク、現證ニ付テ事ヲ切ラント思フ處、彼常ニ雨ヲ心ニ任セテ下ス由披露アリ。此ニ兩火房祈雨アル。去ル文永八年六月十八日ヨリ二十四日ナリ。此ニ使ヲ極樂寺ヘ遣ス。年來ノ御歎キコレナリ。七日ガ間ニ若シ一雨モ下ラバ御弟子トナリテ、二百五十戒具サニ持ツ上ニ、念佛無間地獄ト申ス事ヒガヨミナリケリト申スベシ（一五六六頁）

何といふ大膽な言分であらう。僅の一現證にて立宗の大義を捨てようといふ事は、而も對手にもよれ、雨ヲ心ニ任セテフラスてふ祈雨の名人を以て自ら任じて居る人に、それも一日片時の間の事でない七日間、大雨とでもいふかといふに一滴の雨で、法の邪正を決しようとは寧ろ無茶というてもよい。どんなはづみに一滴の雨が降らぬ事もあるまいと、側のものには心配する處であるが、宗祖聖人は少しも心配なさらない。彼の邪教でどうして雨が降るものかと、これを以て現證と成佛の必然的關係のあることが伺はれるのである。猶ほ七日の間に一遍も雨はふらなかつた。越えて七月四日まで祈りに祈

つたが遂に骨折り損となつた。此時日蓮聖人は良觀上人を責められた言葉に、

法華眞言ノ義理ヲ極メ、慈悲第一ト聞へ給フ上人ノ、數百人の衆徒ヲ率ヒテ七日ノ間ニイカニ雨ヲ
フラシ給ハヌヤラン。是ヲ以テ思ヒ給へ、一丈ノ堀ヲ越ヘザル者、二丈三丈ノ堀ヲ越ヘテシヤ。易
キ雨ヲダニフラシ給ハズ況ヤ難キ往生成佛ヲヤ。後生恐ロシクヲボシ給ハ、約束ノマ、ニ急ギ來リ
給へ。雨フラス法ト佛ニナル道、教へ奉ラン(一六〇九頁)

矢張り祈雨と成佛とは續きであつたのだ。現證利益を單なる方便と輕視することは出來ないのであ
る。然し現證利益の一事に執着して成佛の一大事を忘れたる時は、此の現證は最早現證ではない。單
なる現世祈りに過ぎない。と開導聖人は嫌はれてゐる。

信心といふは佛果を願ふべし、今を祈るは皆迷ひなり

いづれをか大事と思ひ惑ふらん、未來願はじ此世ともなり

現世より未來大事と行すれば今世も共に所願成就

一三、呵責謗法 化他の業は他をして此の妙法五字を受持信唱せしむるが目的である。然し同じく
受持するといつても謗法の穢れがあつてはいけない。此事は前に自行の三業の下に於て述べた通りで
ある。そこで其の謗法の穢れに染まぬやうに指導する責任があるのである。但だ自分の教化した人は
かりでない、進んで他人の教化した人でも矢張り謗法不信の行爲を觀過してはならぬのである。これ

を觀過するものは與同罪といふ罪を作るのである。宗視聖人が四條金吾を責められた御消息に、

一國コゾリテ日蓮ヲカヘリテセム。上一人ヨリ下萬民ニ至ル迄、皆五逆ニ過ギタル謗法ノ人トナリ
ス。サレバ各々モ彼ガ方ゾカシ、心ハ日蓮ニ同意ナレドモ身ハ別ナレバ、與同罪ノガレ難キノ御事
ニ候ニ、主君ニ此法門ヲ耳ニフレサセ進ゼケルコソ有難ク候へ。今ハ御用ヒナクトモアレ、殿ノ御
失ハ脱レ給ヒヌ(一〇五九頁)

涅槃經ニ云ク、若シ善比丘、法ヲ壞ルモノヲ見テ、置テ呵責シ驅遣シ舉處セズンバ當ニ知ルベシ、
是ノ人ハ佛法中ノ怨ナリ、若シ能ク驅遣シ呵責シ舉處セバ是レ我が弟子、眞ノ聲聞ナリ。余、善比
丘ノ身タラズト雖モ、佛法中怨ノ責ヲ遁レンガ爲ニ唯大綱ヲ撮テ粗ホ一端ヲ示ス(三八四頁)

前には與前罪とあり、次には佛法中怨ノ責とあるが、何れも他人の謗法を見免し聞免しにする罪で
謗法と同罪となるのである。猶ほ涅槃經の置テ呵責セズの置の一字を日蓮聖人は非常に強く誡められ
てある。

置不呵責ノ文ノ事、仰ニ云ク此ノ經文ニ於テハ日蓮等ノ類ヒノ恐ルベキ文字一字之レアリ。若シ此
ノ文字ヲ恐レザレバ縦ヒ當座事ナシトモ未來無間ノ業タルベシ。然ラバ無間地獄へ引キ入ル獄卒
ナルベシ。夫レハ置ノ一字是ナリ。此ノ置ノ一字ハ獄卒ナルベシ。謗法不信ノ失ヲ見ナガラ聞キナ
ガラ云ハズシテ置カンハ、必ズ無間地獄へ墮在スベシ。乃至日蓮ハ此ノ字ヲ恐ル、故ニ、建長五年

ヨリ今弘安年中マデ在々所々ニテ申シ張リシナリ、云々。
日蓮一代の折伏は置の一字に始まるといふのである。常講に於て呵責謗法を重視する誠に所以ある
哉。教歌に、

謗法を見つゝ聞きつゝ責めざればわが身も同じ罰當るなり
謗法を責むるは菩薩、せめざるは地獄へ落す鬼にぞありける

第四 信仰の目的

一四、即身成佛 信仰の目的は苦みから離脱して永劫の樂しき生活に入ることにある。日蓮聖人云く。佛法は自他宗異ナリト雖モ、概テ本意ハ道俗貴賤共ニ離苦得樂、現當二世ノ爲ナリ（八六八頁）我等は淺間敷凡夫で而も住む世界は弊惡充滿の火宅の娑婆である。そこで念佛宗などでは捨身往生といふ教を説て、早く此の身を捨て、西方十萬億土の彌陀佛の御膝元へ往生を願へと勸める。これは一種の自殺獎勵になるので寧ろ有害といはねばならぬ。日蓮聖人はこれは佛の眞意ではない方便の教である。眞實の法華經の教は即身成佛であると叫ばれたのである。即身成佛とは身に即して佛を成ずるといふことで即身は捨身の反對である即ち前に述べた下種——我等の己心具有の教徳たる佛性を教へて開顯せしめ其の自在の神力を發揚させる、其の常住不滅、不老不死の生活に遊樂せしめる事である。

然らばそれは何時到達するかといふに、下種された時が到達した時である。これを下種即身成佛といふのである。開導の歌に、

持ちたる日より心の蓮の花、さきてある身と悟りける哉
吾祖師の教へのみ文おろがめば胸の蓮の花ぞ開くる

然らばそれで立派な佛か、といふにこの佛を名字即の佛といふ。此の佛がやがて觀行即の佛、相似即の佛、分證即の佛、究竟即の佛とだん／＼進んで行くのである。究竟即の佛が即ち完成されたる佛である。どんな事をして進んで行くのかといふに慈悲に充滿せる佛は衆生濟度をするより外に樂しみも仕事もないのである。佛立開導日扇上人云く、

淨土參拜シテ樂ヲセウト思フヲサトス。信者心得違ヒラスベカラズト云フ法門ノ事。
九界ノ衆生ノ助ケニモナラズ、教ヘニモナラズ、カラダハ樂シテウマヒモノ食フテ、ヨイ衣ヲ着テ
廣キ殿堂、高キ屋ニ女ト酒トヲ並ベ立テ、百味ノ飲食、遊興ニ娛樂快樂ヲ極ムルヲ樂シミトスル
佛菩薩阿羅漢等ハ寂光淨土ニ一人モナシ、乃至佛菩薩ハ九界ノ衆生ヲ助ケンガ爲ニ身命ヲ抛テ衆
生ノタメニ苦シムヲ樂シミトシ給フ云々（開化要談）

どんな佛でも末法今日に出現される時は菩薩の姿である。これを從果向因、人界示同の尊形と申し奉る。佛果の位より佛因の菩薩界に向ひ、人界に凡夫と同じ姿を示現されるのである。この人間に

示同されて衆生救助の菩薩行が何よりの佛の樂しきとされる所なのである。

死して又、また此の國に生れ来て、法に仕へて人を助けん

苦しみを樂しきとして行すれば難は菩薩の遊戯なりけり

寂光で樂隱居する心なし、娑婆の修行が眞の法樂

一五、寂光淨土 佛の住む世界を寂光淨土といふ。法華經に本佛は常に此の娑婆世界にありと説

かれてある。されば此の娑婆の外に別に寂光淨土はないのである。日蓮聖人云く、今本時の娑婆世

界ハ三災ヲ離レ四劫ヲ出デタル常任ノ淨土ナリ（九三九頁）開導師歌うて云く、

自由自在、娑婆と寂光文福茶釜おなじものにてくるりと變る

經に遊戯神通して佛國土を淨むとある意を咏せられた歌に、

寂光の都と娑婆を思ふ故、けふも御法に遊びくらしつ

死ぬるにはあらでしばらく寂光へ、かへる所はこゝの娑婆也

第五 結 勸

無智の信心に安住し、南無妙法蓮華經と口唱し、妙法經力を以て一切衆生を折伏するが本門佛立講である。佛立開導の教歌に、

幸に智慧なき身こそうれしけれ、しらす本化の菩薩なりけり
今迄はものしり人にあひわびぬ、無智の信者にわれ親しまん
われ人をさすとすばかりの智慧もなし唯信心の友をもとめん

(終)

昭和九年七月十日印刷
昭和九年七月十五日發行

日本宗教講座
第六回配本

不許複製

東京市神田區一ツ橋通町二
編纂發行
會社 東方書院
代表者 三井昌史

東京市小石川區久野町一〇八
印刷所 共同印刷株式會社
代表者 若島謙

發行所 株式會社 東方書院
電話九段三八四二
振替東京六八六一二

終